「人を大切にする経営」実践

全ては「社長の自腹」

技研

製造アウトソーシング業の技研（藤沢市湘南台、☎０４６６・４３・４３１１）は「人を大切にする経営」を進める。工場内での作業請け負いなど、生産から事務まで、お客さんからの業務委託を受ける企業。スタッフの離職が頻繁にあるとされる業界内にあって、入社５年後の定着率は８割以上を達成。尾川邦秋社長が従業員を徹底して大切にする姿勢が奏功している。

同社では月１回の面談のほか、正社員・パートを問わず社長との食事会、日帰りバス旅行、歓迎会といった社内イベントを２カ月に１度の割合で企画。これらの費用は、会社の経費ではなく、全て尾川社長の“自腹”という。「経費で従業員と食事をしたら、それはごちそうとは呼べません」と尾川社長はキッパリ。自身が毎月受け取る役員報酬のうち、実に３分の２以上を従業員のために費やす。お客さんとの飲み会やゴルフまでも全部自腹だ。

一方、年２回はオリジナリティーあふれる社内イベントも企画する。昨年はアメ横で「尾川社長探し」とするイベントを開催。どこかの店舗に隠れている尾川社長を発見した従業員には、その場で賞金３万円を出すというユニークな企画で、好評だったという。

交通事故からの復活劇

■壮絶な人生

そんな尾川社長だが、実は壮絶な人生を歩んできた。幼い頃に両親を亡くし、親戚を転々とした。生活するのも大変で、１４歳のときに単身大阪へ出て仕事を探した。それ以来、５０以上の職に就いたという。最終的には湘南・藤沢に落ち着き、２９歳で市役所職員になった。だが「枠にはまるような生き方をしたくなかった」と、潔く独立した。

しかし、会社が軌道に乗ってきた矢先、クルマの運転中、巻き込み事故に遭う。一命は取り留めたものの、後遺症が残り、長期の車椅子生活とリハビリを↗余儀なくされた。そして入院生活による社長不在により、当時設立していた別会社が継続を断念。それでも見事復活を果たし、今度は「技研」として再出発し、現在に至る。

■人で成り立つからこそ

「自分は周囲の人間に助けられてきました。だからこそ返したいのです」と尾川社長。ビジネスでは、人手不足で悩む中小企業に対し、得意の「業務委託」でサポート。“裏方”として支え続けている。

その内容は軽作業から数十人規模での装置組み立て作業など多種多様。頑張る従業員がいてこそ成り立つビジネスだ。だからこそ“自腹”にこだわるという。

大型施設にも負けず奮闘

新岩城菓子舗

老舗和菓子店の女将、続々と新商品

大型複合施設の開発が相次ぐ中で、商店街の老舗和菓子店が奮闘している。ＪＲ線・川崎駅西口の新岩城菓子舗（川崎市幸区南幸町、☎０４４・５２２・２７２１）は、知恵を絞った新メニューを続々と開発。和菓子離れが進む若者たちからも支持されている。野菜由来のヘルシー和菓子や若者を意識した和洋折衷の創作菓子…。「個店には個店のやり方がある」と、商品開発までのスピードや、お客さんの声を直に聞ける強みを生かし、差別化につなげている。

２０１９年１２月で８８周年。看板商品は、毎朝手焼きするという数量限定「朝どら」（１５０円）だ。開店と同時に店頭に並べると、昼過ぎには売り切れてしまう。皮がふわふわで軟らかく、そして香ばしいのが特徴という。その日の天気や気温により調整し、毎日６０～７０個を作る。三代目女将の徳植由美子さんのアイデア商品だ。

主婦から事業承継を経験

ほかにも、地元農家とコラボし、旬の野菜や果物を使った「地産地消大福シリーズ」を展開。夏に「とまと大福」、冬には手のひらサイズの苺を使った「ジャンボ苺大福」なども販売する。いずれも即日完売だという。「川崎ポテト」「川崎とうふ」も人気だ。

■店を守りたい一心で

もともと、主婦だった徳植さん。１５年ほど前、二代目だった父が若年性アルツハイマーにかかり、突然の事業承継を経験した。小さい頃から父の背中を見てきたものの、和菓子づくりは未経験。高齢ながらも健在だった創業者の祖父・徳植三郎さんに教えてもらうも、昔ながらの「見て覚える」という感覚的な世界に、なかなかついていくことができなかった。

だが、「子どもの頃、父が焼いたどら焼きが大好きでした。自分の育った店を守りたい、その一心でした」（徳植さん）と、あちこちの和菓子屋に教えを乞いにも行った。

奮闘する妻の姿に、銀行員だった夫も仕事を辞め、夫婦二人で和菓子作りをするようになった。そんな姿を見て育った息子も、和菓子屋修業を経験し、今では四代目として同店で働いている。

ガラスで進めるSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

野口硝子

障がい児の自立、ガラスで実現

吹きガラス工房、野口硝子（藤沢市菖蒲沢、☎０４６６・４７・１１４４）が、インドネシアでＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）に対する取り組みを進めている。西ジャワ州・ボゴール市の自閉症児能力開発センター「ＩＮＤＯＲＩＹＡ（インドリヤ）」を支援。ガラス作品の制作で大量に出るガラス端材（カレット）の一部を、同施設に無償で提供、施設の子どもたちが加工した作品をイベントなどで販売している。収益は同施設の運営維持費に充てられている。

同社のノグチミエコ代表によると、インドネシアではまだ「ガラス」という素材は珍しく、ガラスアートも知られていないという。

吹きガラスのアート作品を世界中に発信し、市から「藤沢マイスター」にも選ばれているノグチ代表だが、７年前から年２回、現地に出向いて同施設でワークショップを開催している。「児童たちは自閉症という障がいを持っていますが、感性が豊かで、よい作品も生まれています」とノグチ代表。３年前には、ガラス加工用の電気炉を寄贈した。

支援を続けるノグチ代表は「将来的には、ガラス作品を制作・販売することで収益を上げ、自立に役立ててほしいです」と願いを込めている。

神式のお葬式、じわり普及

照天神社（相模原市緑区中野、☎０４２・７８５・６２５５）による「神道・神式のお葬式」が、じわりと普及している。無宗教や宗教が不明な故人、御朱印集めや神社めぐりが好きだった故人などを対象に、年々依頼が増えているという。

日本に仏教が伝わる前、古くから執り行われてきたのが神道・神式のお葬式。仏式でのお通夜に当たる「通夜祭」、葬儀に当たる「葬場祭」を執り行う。「神道では人は亡くなると神になる。つまり、尊い祖先になると言われています」と金子雄貴代表宮司。

式では、故人が生まれてから亡くなるまでを、いつ生まれ、どんなふうに過ごし、どんな道のりを歩んだかを作文にし、万葉言葉で読み上げる。

人生の終わりを儀式で弔う

照天神社

２０１９年は皇位継承に伴い、さまざまな宮中祭祀（さいじ）が行われる中、今までは知られることのなかった伝統的神事も多くあった。「昔は身近な存在だった神社や神事に触れることの多い１年でした」と、金子宮司は語っている。

取材につき

今年は「売るための努力」を

昨年から海外出張の機会に恵まれている。台湾やベトナムなど、超ローカルの弊紙でも、おかげさまで活動範囲は広まっている。海外に出掛けていつも思うのは、この地に県内の中小企業が進出したら成功できるだろうか、ということだ。

数十年前なら成功していたかもしれない。しかし、今や中国や韓国などのライバル企業も、当たり前のように進出している。海外でも競争なのだ。こうした中、かつては同じ新聞社に在籍し、今は国際ジャーナリストとして海外に在住しながら健筆を振るっている大先輩の話を思い出す。

「海外の展示会に出展している日本企業を見に行くと、開催期間が終わると帰国する会社ばかり。なぜ残って集めた名刺を頼りにフォローしないのか？　ブースでは英語ができない日本人が立っていても不思議ではない。中国企業のブースでは、中国人がちゃんと現地語で応対している。台湾は英語で商談している。それが当たり前なのだ」と。

話は飛ぶが、新聞社の経済部時代、日本ビクター（現ＪＶＣケンウッド）という会社を担当していた。当時「技術のビクター」と呼ばれ、普及し始めた液晶テレビでも卓越した技術力を誇っていた。売上高も１兆円に迫っていた。そのビクターが失速した。理由は、北米市場での大失敗だった。韓国サムスンやパナソニックの安売り攻勢に押され、ビクター製品は「映像美」や「機能」を重視しない米国人の心をつかむことができなかった。当時の社長をインタビューした際「良いモノを出せば売れる時代は終わった」と、しきりに強調していたのを覚えている。

よい技術、製品を作っていれば“売れる”という「神話」は、世界はおろか、もはや日本でも通用しなくなっている。どうしたら売れるか。売るためには何が必要なのか。そろそろ中小企業も真剣に考えなくてはならないと思っている。今年こそそうあってほしい。

（千葉　龍太）

社長さんが知っておきたい 冠婚葬祭のマナー

新年あけましておめでとうございます。今年も街の葬儀屋さんとして、みなさまに冠婚葬祭のマナーを分かりやすくお届けしてまいります。どうぞお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

前回、弔問に伺う際の服装・喪服についてご紹介しましたが、着用する時にも、細かなマナーや決まり事などがあります。

そこで今回は、**「喪服の着こなし方・男性編」として３つのポイント**を押さえながら一般的なフォーマルブラックスーツを例に、ご紹介していきます。

すぐに役立つ葬儀マナー④ ～喪服の着こなし方・男性編～

①おしゃれな装飾は控え、光沢のない無地のもの

喪服の基本は、黒と白のモノトーンです。組み合わせるワイシャツは白無地、襟はレギュラーカラー、袖はシングルのものがベストです。ネクタイは、光沢のない黒無地。靴下も黒無地が原則ですが、着席した時などに素肌が見えないように長いものを着用ください。ハンカチや扇子、マフラーや手袋のような小物もモノトーンで合わせましょう。

②派手なアクセサリーは身に着けない

男性が身に着けるのであれば、結婚指輪のみがベストです。豪華な腕時計や光り物であるネクタイピンなどは外し、ベルトも黒色で刺繍や装飾のない地味なものを選びましょう。そして、靴は光沢のない黒革靴で、金具や飾りもないシンプルなデザインのものにしましょう。「殺生」を連想させるような、爬虫（はちゅう）類系の革でできたベルトや、毛皮のコートなども避けましょう。ウールやカシミヤ製は問題ありません。

③鏡で身だしなみをチェックする

厳粛な場に伺うときは、特に失礼のないように確認しましょう。

上から順に、髪は整えられているか、喪服が清潔でシワや汚れがないか、ネクタイの結び目が曲がっていないか、靴の手入れが行き届いているかを確認して身だしなみを整え、最後に、忘れ物がないかもチェックしましょう。

男性のたしなみとして、スマートに対応できるよう、参考にしていただけたら幸いです。

（清水誠葬具店副社長・清水ふじ代）